

二〇一三年一二月三〇日

枯 萩 の 面 輪 に 絡 む 磨 崖 仏  
尻 もち の 後 引く 痛さ 年 詰 ま る  
窓 拭き の 母娘 痺し 年 用 意  
一 年 の 無事 顧みつ 初湯 殿  
一〇一三年一二月二九日

神木の紙垂も真白く年用意  
ため息のごとし暖機の排氣ガス  
頑張るをやめてゆるゆる年の暮  
大海老を奮発したる晦日蕎麦  
耳搔きの膝あけて待つ縁小春  
手套脱ぎま白き献花捧げけり  
立つ湯気もまさら新調炊飯器  
一〇二三年二月二八日

おもちや抱き仕事納めの夫帰る  
母偲ぶ形見のショール暖かし  
冬日満つ砂場に残る砂の城  
鉄瓶の湯氣に塞かるる通し土間  
溜池に魚影の透けるうす氷  
厨いま大騒動や松葉蟹

賀状書くにぶる指先励ましつ  
数へ日やうたた寝の母寧らけく  
嚏して見失ひたる星座かな  
モノクロと化して生駒峯眠りけり  
数へ日やまだ田に残る人の居て

千たひあは あか素なきな やあひ千たかなか たむは愛  
かのひく ひえつよつ よひの かえる たかべく  
鶴子とる る秀きえ いると 鶴子 すく正

二〇一三年二月二六日  
年用意子の手夫の手借りもしつ  
友逝けり吾が冬帽子褒めしまま  
年ごとに動かぬ手足日の短  
蓋凍てし郵便受けに回覧板  
賀状書く金釘なれど心込め  
二〇一三年一二月二五日

年用意子の手夫の手借りもしつ  
友逝けり吾が冬帽子褒めしまま  
年ごとに動かぬ手足日の短  
蓋凍てし郵便受けに回覧板  
賀状書く金釘なれど心込め  
二〇一三年一二月二十五日  
長々と貨物列車は枯野行く  
日当たりの窓に背伸びすシクラメン

二〇二三年二月二四日

毎日句会みのる選・二〇一一年一月一日